子どもの人間関係についての教師の意識に関する調査研究

尾山　尚江*）　杉山　緑

On the Teachers' Realization about Pupils' Human Relations

OYAMA Naoe and SUGIYAMA Ryoku
(Received June 18, 2003)

キーワード：　人間関係　　教育活動　　遊び仲間集団　　学級集団

Ⅰ　はじめに

平成10年の学習指導要領改訂を機に、不登校、ひきこもり、学級崩壊といった子どもの人間関係にかかわる問題が再びクローズアップされてきている。それは人間関係のあり方ばかりでなく、対人関係能力＝交わり能力の未熟さとしても考えられている。子どもたちの関係のどこに問題があるのか、そしてそれに対してどうすることが求められているのか。本研究では、学校現場で実際に子どもたちと接している教師の問題事態の把握状況、それへの対応として教師自身が今何を必要と考えているのか等の調査を通して、先の問題解決のための糸口を探ろうと考えた。

Ⅱ　調査の概要

調査の概要は以下の通りである。

1．調査期間：平成14年８月21～22日
2．調査対象：平成14年度山口県免許法認定講習、「特別活動」「栄養学」「障害児の心理」の受講者
3．調査方法：質問紙法におけるアンケート調査
4．標 本 数：416
5．回 収 率：100％

Ⅲ　調査対象の属性別回答数

1．年　齢

年齢層	30歳未満	30歳以上40歳未満	40歳以上50歳未満	50歳以上	合　計
回答数	52人	168人	174人	22人	416人
比　率	2.5％	40.4％	41.8％	5.3％	100％

30歳以上40歳未満、40歳以上50歳未満の教員が共に40％台である。一方30歳未満、50歳以上の教員はそれぞれ10％にも満たない。年齢層にばらつきがある原因として、採用数が

*）山口大学大学院教育学研究科学校教育専修

減少してきたことや、50歳以上では免許の切り替えが終わっているなど、認定講習の事情が影響しているものと思われる。

2．性　別

性	男　性	女　性	合　計
回答数	138人	278人	416人
比　率	33.2%	66.8%	100%

男性教員と女性教員の比率はおよそ３：７である。

3．教職経験年数

経験年数	５年未満	５年以上10年未満	10年以上20年未満	20年以上	合　計
回答数	42人	65人	203人	106人	416人
比　率	10.1%	15.6%	48.8%	25.5%	100%

１の年齢に対応して、教職経験年数は、10年以上20年未満の教員が約半数を占めている。

4．勤務校

校　種	小学校	中学校	高等学校	盲・聾・養護学校	その他	合計
回答数	173人	59人	26人	156人	2人	416人
比　率	41.6%	14.2%	6.3%	37.5%	0.5%	100%

㈱「その他」は、青少年勤労施設（社会教育課）１人、小・中学校兼務　１人

校種では、小学校が41.6%、盲・聾・養護学校が37.5%で、合わせて約８割である。それに対して、中・高等学校の割合が低い。盲・聾・養護学校の割合が高いのは、認定講習の受講者が特に多いことに起因している。

Ⅳ　調査結果及び考察

1．子どもの人間関係が教育活動全体へ及ぼす影響について

日頃子どもと向き合う教師のなかに、子どもを取り巻く人間関係がどの程度意識されているのであろうか。そして子どもの関係性は、具体的には学校教育活動のどの場面で影響を与えると意識されているのであろうか。「子どもと親」、「子どもと教師」、「子ども同士」に分けて、それぞれがどのように捉えられているのかを以下の設問により調査した。

なお、影響を与える場面では、調査者が設定した場面「その他」で「休み時間」「生徒指導・生活指導」「生活全般」を共通に挙げている人が多かったので、図１、図２、図３では項目として取り上げた。

1．1．子どもと親の関係

設問1「子どもと親の関係は、教育活動全体に影響を与えていると思われますか。

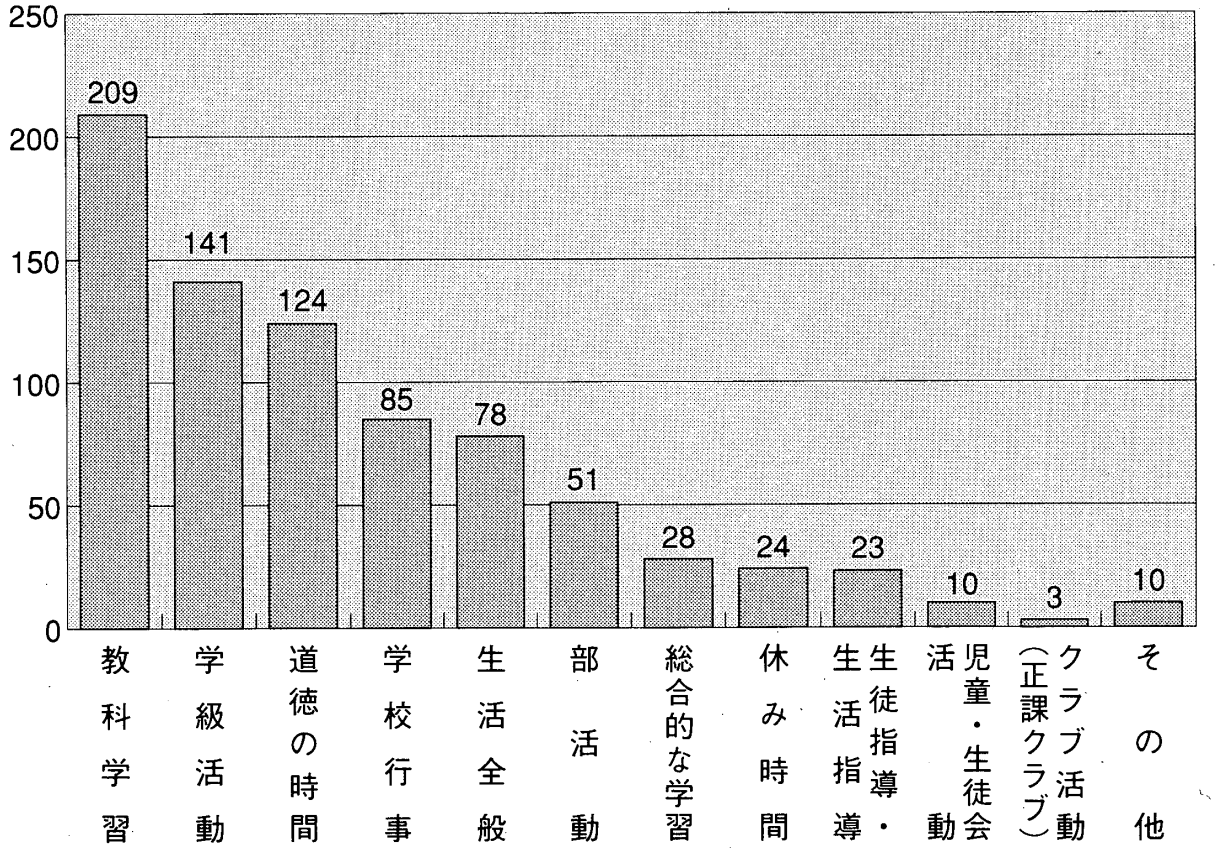
表1　子どもと親の関係による影響

	①非常に与えている	②まあまあ与えている	③あまり与えていない	④全く与えていない	合　計
回答数	344人	64人	4人	4人	416人
比　率	82.7%	15.4%	1.0%	1.0%	100%

子どもと親の関係が影響を「非常に与えている」(82.7%) と「まあまあ与えている」(15.4%) の肯定的回答が全体の98%にも達した。逆に「あまり与えていない」と「全く与えていない」の回答を合わせると2%であった。

続いて、①「非常に与えている」②「まあまあ与えている」を選択した人のみ、特に影響を感じる場面を2つ回答してもらった。その合計結果を次に示す。

図1　子どもと親の関係で特に影響を感じる場面［単位：人］



影響を強く感じる場面では、「教科学習」209名 (26.6%) が最も多く、次に「学級活動」141名 (17.9%) と「道徳の時間」124名 (15.8%) が後を追っている。この3つで全体の60%を占める。逆に少なかったのは「クラブ活動 (正課クラブ)」3名 (0.4%)、「児童・生徒会活動」10名 (1.3%) であった。

以上の結果から、子どもと親の関係は教育活動に関係しており、その中でも特に教科学習への影響が強いという見方の教師が多いことがわかる。

1．2．子どもと教師の関係

設問２　「子どもと教師の関係は教育関係全体に影響を与えていると思いますか」

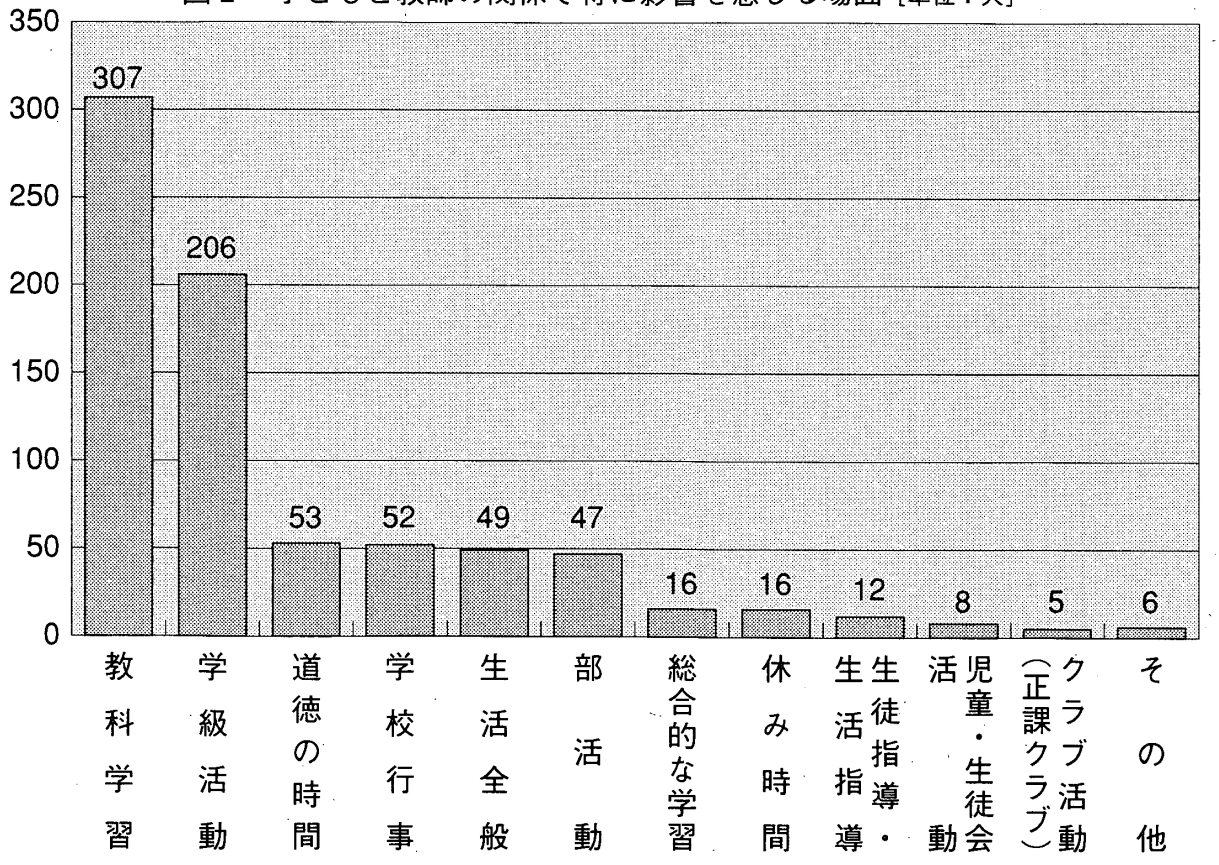
表２　子どもと教師の関係による影響

	①非常に与えている	②まあまあ与えている	③あまり与えていない	④全く与えていない	合　計
回答数	298人	105人	7人	2人	412人
比　率	72.3%	25.5%	1.7%	0.5%	100%

子どもと教師の関係が及ぼす影響を「非常に与えている」(72.3%) と「まあまあ与えている」(25.5%) で、全体の97.8%を占めた。逆に「あまり与えていない」と「全く与えていない」を合わせると２.２%であった。

続いて、①「非常に与えている」②「まあまあ与えている」を選択した人のみ、特に影響を感じる場面を２つ回答してもらった。その合計結果を次に示す。

図２　子どもと教師の関係で特に影響を感じる場面［単位：人］



影響を強く感じる場面では「教科学習」307名(39.0%)が１位、「学級活動」206名(26.1%)が２位、「道徳の時間」53名（6.7%）が３位であった。逆に少なかったのは「クラブ活動(正課クラブ)」５名（0.6%）や「休み時間」８名（1.0%）であった。

以上の結果から、子どもと教師の関係は教育活動と関係しており、その中でも特に「教科学習」や「学級活動」に影響しているという捉え方であることがわかる。

1．3．子ども同士の関係

設問３　「子どもと子どもの関係は教育活動全体に影響を与えていると思いますか」

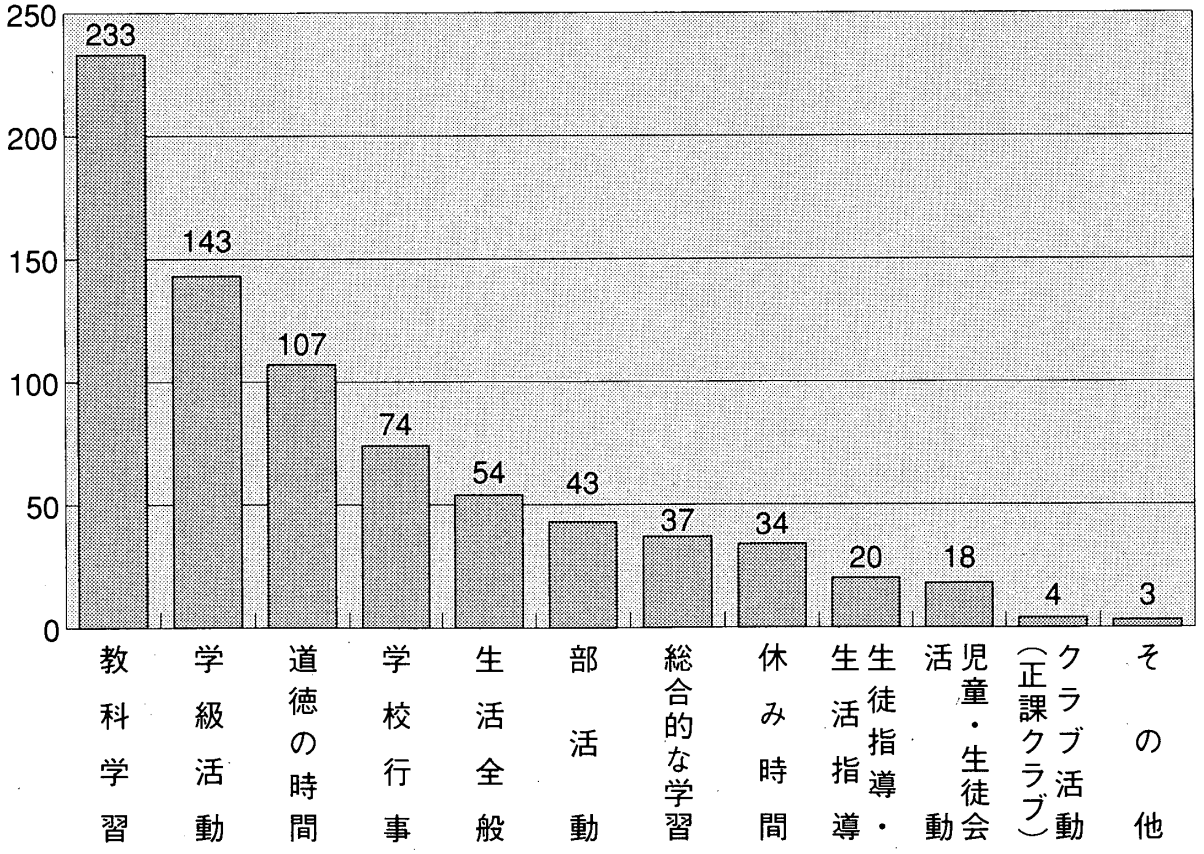
表３　子ども同士の関係による影響

	①非常に与えている	②まあまあ与えている	③あまり与えていない	④全く与えていない	合　計
回答数	282人	115人	14人	2人	413人
比　率	68.3%	27.8%	3.4%	0.5%	100%

子ども同士の関係が影響を「非常に与えている」(68.3%)、「まあまあ与えている」(27.8%)で、全体のおよそ96%が影響力を認識している。逆に「あまり与えていない」と「全く与えていない」とを合わせると３.９%であった。

続いて、①「非常に与えている」②「まあまあ与えている」を選択した人のみ、特に影響を感じる場面を２つ回答してもらった。その合計結果を次に示す。

図３　子ども同士の関係で特に影響を感じる場面［単位：人］



子ども同士の関係で特に影響を感じる場面では、１位の「学級活動」233名（30.3%）と２位の「教科学習」143名（18.6%）を合わせると約半数を占め、次いで３位「部活動」107名（6.7%）となった。逆に少ないのは「生徒指導・生活指導」４名（0.5%）「クラブ活動（正課クラブ）」18名（2.3%）であった。子どもと子どもとの関係のあり方は、子どもの自治活動が基本となる「児童・生徒会活動」や「クラブ活動（正課クラブ）」の場面でも大きく表れると予想されていたが、教師の意識の中にはそれほど大きく挙がっていな

い。これらの活動に対しては担当教員以外の教員が実態を把握しにくいということも考えられる。

2．子ども関係の問題点と主な原因

子どもを取り巻く関係性の問題として、ここ数年いじめや不登校といった問題が大きく指摘されている。そしてその根底にある問題として、関係をつくる技術（友達づくりの技術）或いは、関係そのものを避けるといった個々の子どもの質的な変化や問題点も指摘されている。そこで教師がどういった点に最も強く問題を感じているのか、またその主たる原因がどこにあると考えているのかを調査した。

2．1．学校・学級内における子ども関係の問題点

学校・学級内における子ども関係の問題として、教師は特に何を強くとらえているであろうか。設問４で尋ねた。

設問４「学校・学級内の子ども関係の問題点で、現在一番問題だと思うのは次のどれですか」

表４　子ども関係の問題点

	①いじめ	②暴力	③無関心・自己中心的な態度	④不登校	⑤言葉・態度のコミュニケーション不足	⑥その他	⑦特に感じていない	合計
回答数	43人	4人	212人	15人	125人	11人	6人	416人
比率	10.3%	1.0%	51.0%	3.6%	30.0%	2.6%	1.4%	100%

問題点の１位が「無関心・自己中心的な態度」(51.0%)、２位が「言葉や態度のコミュニケーション不足」(30.0%）と合わせて８割を超えた。逆に「いじめ」「不登校」「暴力」に関してはそれぞれ10.3%、3.6%、1.0%とそれほど高くはなかった。一般によく報じられる関係性・対応性の問題で引き起こされる現象よりも、実際には個人レベルでの問題のほうがより強く意識されているようである。

2．2．子ども関係の問題点に対する主な原因

次に設問４でとらえられた問題の主たる原因としては、どんなことが考えられているのかを、設問５で尋ねた。

設問５「子どもの人間関係で問題となるものの主たる原因は何だと思いますか」

表５　子ども関係の問題点に対する主な原因

	①親の養育態度	②教師の接し方	③地域の環境	④商業主義・個人主義の社会風潮	⑤少子化・核家族化	⑥友達と遊ぶの機会の減少	⑦共稼ぎ家庭の増加	⑧その他	合計
回答数	178人	12人	15人	83人	41人	56人	5人	18人	408人
比率	43.6%	2.9%	3.7%	20.3%	10.0%	13.7%	1.2%	4.4%	100%

子ども関係の問題点に対する主たる原因では、１位が「親の養育態度」(43.6%)、２位が「商業主義・個人主義といった社会風潮」(20.3%)、そして「友達と遊ぶ機会の減少」(13.7%) であった。逆に少ないのは、「地域の環境」(3.7%)、「教師の接し方」(2.9%)、「共稼ぎ家庭の増加」(1.2%) であった。これらの結果から、子どもの人間関係を損なう要因の大半は親の養育態度に起因しており、教師の影響力に関してはそれほど強く問題視されていない。また第２位に社会的な風潮が挙がっていることから、このような親の養育態度を生み出す背景が社会にも関係していると考えられる。

なお設問４と設問５の結果をクロス集計してみると、どのような原因が挙げられようとも、子ども関係の問題点は「無関心・自己中心的な態度」「言葉・態度のコミュニケーション不足」のどちらかが１位、２位を占めた。

３．遊び仲間集団内の子ども関係

子ども同士の関係において、インフォーマル集団である「遊び仲間」とフォーマル集団である「学級集団」それぞれにおいて、その関係性は教師の目にどのように映っているのであろうか。

まず、遊び仲間集団内における、構成人数、年齢構成、特定のリーダーの存在（リーダーの固定化)、協力体制に関して尋ねた。そしてそれらをふまえて「以前の子どもたちと比較して、現在の子どもたちの遊び仲間関係をご自分の目でご覧になってどう思われますか」という設問を設定した。設問では上記の部分を強調したいために、アンダーラインも付記した。

なお、遊び仲間集団の捉え方については、学校の休み時間や放課後の様子、或いは教師の居住地域における子どもの様子も含め、掌握可能な範囲での回答を求めることを口頭で説明した。結果は以下の通りである。

３．１．遊び仲間集団の人数構成

近年、子どもの遊び仲間が少人数化しているという指摘がある。教師が把握している人数はどのくらいであろうか。設問６で尋ねた。

設問６　「遊び仲間の構成は、平均何人くらいですか」

表６　遊び仲間の人数構成

	①１人(本人のみ)	②２，３人	③４～８人	④９人以上	⑤決まっていない	合　計
回答数	９人	270人	81人	0人	50人	410人
比　率	2.2%	65.9%	19.8%	0.0%	12.2%	100%

遊びの人数構成は「２，３人」が65.9%で最も多く、次が「４～８人」で19.8%だった。意外にも、「１人」という回答は2.2%にとどまった。だが、「９人以上」の回答は０%であり、かつてのように大人数で群れて遊ぶ姿は見られなくなったようである。

なお、「決まっていない」という回答も12.2%あるが、どのような事情で固定した遊び仲間がいないのか、この点についてはさらに調査が必要であろう。

3．2．遊び仲間集団の年齢構成

次に子どもの遊び仲間集団の年齢構成はどのようなものと捉えられているのであろうか。設問７で尋ねた。

設問７　「年齢構成はどれが多いですか」

表７　遊び仲間の年齢構成

	①同年齢が多い	②異年齢が多い	③どちらともいえない	合　計
回答数	327人	18人	67人	412人
比　率	79.4%	4.4%	16.3%	100%

遊びの年齢構成については「同年齢が多い」が79.4%で最も多い。「異年齢が多い」という回答はわずか4.4%であった。これは学校における学級・学年集団の同級生という横の関係が、そのまま遊び集団の中に持ち込まれていると考えられる。このことは地域においても異年齢集団による遊びの体験が減ってきていることを意味していると予想されるものである。

なお、設問６と設問７をクロス集計してみると、遊びの年齢構成は人数にかかわりなく、「同年齢」のほうが多いことがわかった。

3．3．遊びの中心となるリーダーの固定化に関する状態

続いて、遊び仲間集団におけるリーダーの存在や、その状況についての把握を設問８で尋ねた。

設問８　「遊び仲間の中心となる子ども（リーダー）は固定化していますか」

表８　遊び仲間におけるリーダー

	①いつも同じ子ども	②遊びの種類によって変わる	③その時の気分や雰囲気で変わる	④中心となる子どもがいない	合 計
回答数	189人	68人	66人	84人	407人
比　率	46.4%	16.7%	16.2%	20.6%	100%

遊びの中心となる子どもが「いつも同じ子ども」という回答は50%に満たなかった。遊び集団のリーダーはあまり固定化傾向にないと捉えられている。またこの結果から、従来遊び集団においてしばしば見られた新しいリーダーの登場や、主導権をめぐるせめぎあいといった状況も教師の目を通して見ればあまりないということも言えそうである。それは「中心となる子どもがいない」という回答が２割程度であることからもわかる。ただ、実際にそのような傾向としてあるのか、それとも教師には見えにくくなっているだけなのか即断はできない。さらなる調査が必要である。

3．4．　遊び仲間集団の協力体制の状態

さらに、遊び仲間集団での協力体制は教師の目にどのように映っているのかを設問９で尋ねた。

設問９　「遊び仲間で活動しているときには協力し合っていますか」

表９　遊び仲間の協力体制

	①大変よく協力し合っている	②まあまあ協力し合っている	③あまり協力し合っていない	④全く協力し合っていない	合計
回答数	12人	303人	88人	6人	409人
比　率	2.9%	74.1%	21.5%	1.5%	100%

「まあまあ協力し合っている」という回答が最も多く74.１％である。「大変よく協力し合っている」(2.9%) を含めると、約８割の教師が協力体制はあると評価している。遊び仲間関係においては一見、よい協力関係が存在するように映っているようである。しかし、子どもの人間関係のあり方が問題にされている近年の状況からすれば、ただ「協力している」というばかりでなく、そこでの協力関係がどのような質のものであるのか、どのようなちから関係の中で成立しているのか等はさらに検討されるべき課題であろう。

４　学級集団（学級活動等）内の子ども関係

ここでは「遊び仲間集団」との比較として、フォーマル集団である「学級集団」内の子ども関係を取り上げた。項目は、リーダーの固定化、グループ活動での協力体制に関するものである。

４．１．学級集団でのリーダーや班長を中心とした活動状態

教師は学級集団のリーダーの活動状況をどのように捉えているのであろうか。設問10で尋ねた。

設問10　「リーダー（例えば班長）を中心として活動が行われていますか」

表10　リーダーを中心とした活動

	①大いに中心となって活動している	②まあまあ中心となって活動している	③あまり中心となっていない	④全く中心となっていない	合計
回答数	9人	223人	154人	22人	409人
比　率	2.2%	54.7%	37.7%	5.4%	100%

「まあまあ中心となっている」という回答が最も多く54.７％である。約６割近くの教師が、フォーマルリーダーがある程度機能していると捉えている。この点に関しては、遊び集団と異なり教師の指導があるためにリーダーが機能していると考えられる。他方で「あまり中心となっていない」「全く中心となっていない」という回答も40%余りある。教師の指導が行き渡っていないのか、また場合によっては教師がリーダー体制そのものを敢えてつくらない、あるいは重視していないといったことも考えられる。また、回答者のうちかなりの数が養護学校等の勤務であるため、その特殊性すなわち子どもの障害の種類や程度が一人一人異なるため、健常児学級でのようなリーダー体制は取りづらいといったことも推測される。

４．２．学級集団内のグループ（班）活動の協力関係

グループ活動における協力体制はどのように把握されているのかを設問11で尋ねた。

設問11 「グループで活動しているときは協力し合っていますか」

表11 グループ（班）での協力関係

	①大変よく協力し合っている	②まあまあ協力し合っている	③あまり協力し合っていない	④全く協力し合っていない	合計
回答数	4人	279人	116人	9人	408人
比率	1.0%	68.4%	28.4%	2.2%	100%

「まあまあ協力し合っている」という回答が最も多く68.4％である。約7割の教師がグループでの協力体制がある程度機能していると捉えている。学級集団におけるグループ活動は、通常、教師の指導のもとで意図的に計画されるものであるため、子ども一人一人の役割分担もある程度明確であり、協力しやすい条件が整っている。したがってこのような結果は当然と言えよう。むしろ、「あまり協力し合っていない」「全く協力し合っていない」という回答が3割余りあることが問題ではなかろうか。なぜなら、学級活動のようなフォーマルな活動にあっても教師の指導が入りにくく、協力関係が取りにくくなっているという可能性も考えられるからである。

5．子どもの人間関係に対する教師のアプローチ

以上、子どもの人間関係について、教師がどのように意識・把握しているかを調査した。

では、教師はこれまでに示された自身の把握に基づいて子どもの人間関係づくりにどのように対応していくことが大事だと考えているのであろうか。このことに関しては自由記述で回答を求めた。

設問12「子どもの人間関係をよりよいものにしていくために、今、教師に求められているものは何だと思いますか。自由にお書きください。」

自由記述のため回答の内容は多岐にわたっており、また一人の回答に複数の内容を含むものもあった。そのすべてを列挙することはできないので、その中から共通すると思われる内容をまとめ、①望ましい人間関係のモデルやスキルの指導、②教師自身の意識改革や全体的な資質の向上、③児童・生徒理解或いは教師と子どもの関わり合いの深化、④教職員集団・家庭・地域社会との連携づくりという大きく4つのカテゴリーに分類した。それを整理したものが表12である。

なお、何らかのかたちでこの設問12に回答した者は390名であり、有効回答率は93.8%であった。

表12 子どもの人間関係に対する教師のアプローチ

	①望ましい人間関係のモデルやスキルの指導	②教師自身の意識改革や全体的な資質の向上	③児童・生徒理解或いは教師と子どもの関わり合いの深化	④教職員集団・家庭・地域社会との連携づくり	合計
回答数	153人	113人	96人	28人	390人
比率	39.2%	29.0%	24.6%	7.2%	100%

「望ましい人間関係のモデルやスキルの指導」について言及したものが最も多く、153人であり、続いて「教師自身の意識改革や全体的な資質の向上」が113人、「児童・生徒理解・子どもとの関わり合いの深化」96人、「教職員集団・家庭・地域社会との連携」28人とい

う結果であった。何よりも子どもたちの人間関係づくりの能力・交わり能力の未熟・未成熟さが問題であり、その力をどうやって身につけさせるかが大切と考えられている。と同時に、それを可能にする教師自身の資質・能力の向上が求められていること、児童・生徒理解の深化等が重視されていることもそのことと無関係ではなさそうである。なぜなら、指導する側の教師が、今日の子どもの変容に対する的確な把握に苦労しており、有効な手だてを打てないでいる現状も垣間見えるからである。
以下に、それぞれの代表的な意見を幾つか示しておく。

＜回答例＞
①「望ましい人間関係のモデルやスキルの指導」に関して（39.2%）
・子ども同士で解決したり、支えあったりする体験の場づくりをすること。
・学級集団づくりを見直し、もっと力を注ぐこと。
・子ども集団の中でリーダーを育成すること。
・道徳教育やエンカウンターを充実させること。
・子どもがソーシャルスキルを身につけられるような活動を仕組んでいくこと。
②「教師の意識改革や全体的な資質の向上」に関して（29.0%）
・教師自身が多様な価値観をもち、人間性を磨く必要がある。
・教師自身がコミュニケーション能力を身につけること。
・自身の固定観念にとらわれず、幅広い識見でもって子どもをとらえること。
・研修を積み、的確な判断力と指導力を向上させること。
・教師のリーダーシップを発揮しながら、コーディネート力を高めること。
・あらゆる努力を惜しまず、豊かな表現力と熱意でもって子どもに接する姿。
③「児童・生徒理解或いは教師と子どもの関わり合いの深化」に関して（24.6%）
・子どもの本質を見極めるためにも、教師自身の心のゆとり、時間のゆとりをもてるようにすること。（一緒に遊ぶ、もっと子どもの会話に耳を傾ける等）
・子ども一人ひとりの特性（立場や家庭環境を含む）を理解し、信頼関係を深めること。
・全員参加型で、誰もが意欲を見せられるような授業づくり。
④「教職員間・家庭・地域社会との連携づくり」に関して（7.2%）
・職員間の人間関係を向上させ、協力体制をつくること。
・家庭との連携・協力体制づくりの促進。親教育も含む。
・教育制度や教育課程の見直しと行政へのはたらきかけ。

ちなみに、以上の結果を各属性別に比較した。その結果、年齢や経験年数と記述傾向にはほとんど関連は見られなかった。しかし、性別では、男性教員では「教師の意識改革や全体的な資質の向上」（39.7%）を多く挙げているのに対し、女性教員では「人間関係の規範やスキルを教える指導技術」（44.0%）を多く挙げている。また、校種別では、小・中・盲・聾・養護学校教員では「人間関係の規範やスキルを教える指導技術」（約40%）を多く挙げているのに対し、高等学校教員の1位は「児童・生徒理解による子どもとの人間関係づくりの促進」（約40%）を多く挙げている。

V　まとめ

以上の調査結果から次のようなことがいえるだろう。今回の調査では、子どもを取り巻く人間関係（親・教師・子ども）が教育活動に大きく影響を与えているという多くの教師の意識を映し出した。

まず第１に、この影響力の強さという点からいえば、「子どもと親」が最も強く、続いて「子どもと教師」、「子ども同士」の順であった。また、特に影響を与える場面ではいずれの関係でも「教科学習」や「学級活動」の占める割合が高い。これらのことから、学習指導においても、人間関係づくりを考慮した指導の重要性が指摘できよう。そして学習指導と学級指導が相互に密接な関連を持つことで教育活動の質も高まるといえる。またそのことが公教育すなわち学校教育において、集団で学ぶことの意義ともいえるであろう。

第２に、子ども関係の問題点やその原因に対して教師の指導性をどのように生かしていくかという点である。

教師の多くは、いじめや不登校をなくすといった現象面を問題にするというよりは、むしろその背後にある内面的なものすなわち「無関心・自己中心的な態度」「言葉・態度のコミュニケーション不足」などの子どもの特質を問題として感じとっている。そのため、そうした点を改善していくことのできる授業づくり、学級づくりが求められている。またそれらの背景要因として挙がった「親の養育態度」に関しては、学校・教師と親・保護者との緊密な協力体制づくりの強化、「商業主義･個人主義といった社会風潮」に関しては、例えば賢い消費者としての資質づくりや多様な情報に惑わされないメディアリテラシーの育成等を通して文化的価値観の形成を促す指導も考えられる。

第３に、子ども集団におけるリーダーシップの確立と相互の協力体制の構築の問題が挙げられる。

まず、遊び仲間集団におけるリーダーは「いつも同じ子ども」という回答は４割強であり、かつてのように特定のリーダーが必ずしも存在していないと見なされている。もしこのことが今日の子どもの実態をある程度示していると解釈することができるならば､従来、遊び仲間集団において遊び文化の継承とその重要な要素の一つであったリーダーシップの在り方の継承も十分に行われていないという予想ができる。つまり近年すぐれたリーダーシップを持った子どもが少ないといわれる原因の一つと考えられる。

他方、学級集団におけるフォーマルリーダーがある程度機能しているかどうかという点については「大いに中心となって活動している」と「まあまあ中心となって活動している」とを合わせると約６割の回答であった。このことからすれば、学級におけるリーダーが遊び仲間のリーダーに発展していく可能性があるかと思われる。もとより遊び仲間におけるリーダーシップのあり方と学級におけるフォーマルなリーダーシップのあり方とでは期待される質が異なっているのは確かである。しかし、学級で育てられるフォーマルリーダーの力量が遊び仲間においても発展的に機能する可能性はある。したがって学級集団におけるフォーマルなリーダーシップを望ましい方向に育てていくことは重要であり、そのための手だてを教師がいかに構想しうるかが問われることになろう。

第４に、子どもの人間関係の改善に対して教師がこれからどのような面からのアプローチが必要と考えているかに関する自由記述から、以下の点に触れておきたい。表４にも示されているように、ここでも子どもの人間関係の希薄化や表現力の不十分さ・未熟さに多

くの教師が言及している。そしてまた、望ましい人間関係のモデルや友達づくりの技術が不足していることも指摘している。そのため、そのような問題点を克服するちからを子どもに育てうる指導技術の向上に関する声が最も多かった。なかでも体験学習、道徳教育、エンカウンター、ソーシャルスキルといった具体的、直接的な指導方法を求める声も多い。したがってそのような指導方法・技術の開発が急務といえよう。

他方、そればかりではなく、教師自身にも課題があるとする意見も多かった。たとえば「まず教師自身が望ましい人間関係のモデルとなりえているかどうか」あるいは「幅広い表現力・コミュニケーション能力を身につけているか」といった手本としての教師のあり方を問題にする見解である。また、「教師と子どもとの人間関係づくりを促進する」といった児童・生徒理解やかれらとのコミュニケーションの成立を重視する声も多い。こうした面での教員の資質向上に向けた取り組み（研修の充実など）も必要である。

ところで、設問1や設問5の結果から、とりわけ「親子関係が教育活動に大きく影響する」とする教師の理解がかなり明確に示されたにもかかわらず、教職員・家庭・地域社会との連携に言及した意見は意外にも少なかった。これは眼前の子どもへの対応や学校内の諸業務に追われ、家庭や地域との連携づくりまでに時間を十分に割けない現場の状況を反映しているとも考えられる。ただ、そうはいってもPTA活動の充実などを通して、家庭や地域と一体的に取り組んでいかなければ今日の学校教育は立ち行かない現実があることも事実である。現状の中でいかにこれらの問題を解決していくかが今後の課題である。

第5に、筆者らは、調査対象者たちが小学校から高等学校、さらには養護学校教諭と様々であり、かれらが相手をする子どもの年齢や発達段階等にも違いがあるため、調査対象者が所属する校種によって問題への認識や意識に違いが表れるのではないかと予想していた。しかし、クロス集計等の結果は、人間関係の問題点や主な原因、遊び仲間集団内の人間関係、学級集団内の人間関係など、いずれにおいても校種による差異はほとんど見られなかった。予想外の結果であったが、このことは今日の子どもたちの人間関係の問題は年齢等にかかわりなく共通しているということになる。

なお、本調査は、認定講習参加者を対象としたため、調査対象の校種別人数等に偏りがあることは否めない。したがって、より精度の高い調査研究とするためにはさらに詳細な校種別の調査を行うことが必要である。また、望ましい子どもの人間関係を構築する実際的で有効な手立てを考えるためには、保護者や児童・生徒にも同様の調査をして、比較検討することも求められよう。今後の課題としたい。

参考文献

・全国生活教育連盟『学級集団づくり入門～第二版～』、明治図書、1971年.
・全国生活教育連盟『学級集団づくり入門～小学校編～』、明治図書、1990年.
・吉本　均『思考し問答する学習集団～訓育的教授の理論～』、明治図書、1995年.
・佐藤　学『教室という場所』、国土社、1995年.
・藤岡　完治『関わることへの意思～教育の根源～』、国土社、2000年.
・津村俊充、山口　真編『人間関係トレーニング』、ナカニシヤ出版、1996年.
・住田　正樹、高島　秀樹編『子どもの発達と現代社会』、北樹出版、2002年.